

第23回宮古島トライアスロン大会（手記）

2007年04月25日（水）

N. SUGIMOTO

吉野海岸のサンゴ礁で小魚と戯れ、昨夜宮古から帰った。そして今年の宮古は終わった。

3週間前にやってしまった右脚の肉離れはまだシコリがあり完治に程遠い。脚への負担が少ないスイムとバイクが何とか成りそうだったのでとにかくスタートラインに立つ事にしたのだった。再発すれば即リタイヤであり、爆弾を抱えてのスタートで結果が悪ければ無謀とか、歳も考えずに…とか言われるパターンである。大事に慎重に行くしかないのであった。レースが終わって、心配した肉離れ等故障も無く完走出来た事でほっとしている。

レースとしては本意でない面が有るのは否めないが、遅かったがゆえに体験できた事もあった。

これまでは、どちらかと言えばもてる力を出し切った達成感、満足感が「今年も宮古に来て良かった」と思わせるのであった。しかし今回は頑張れない、我慢のレースであった。そして特にランでは脚に負荷を掛けないように初めから歩きを入れての戦いであった。5km 毎の表示がこんなに長く感じた事は無い。こんな走り？を3時間もしていると沿道からの応援、励ましの言葉を頂き感謝するも、情けなく、段々惨めな気持ちになってくる。25kmの表示を過ぎたころだっただろうか、この地点では大方の人は黙って黙々と何かに耐えてただひたすらゴールに向かっていく。自分もこの“長さ”に耐えかねていた。そんな時たままたま並走するランナーのウエアに表示された所属クラブチーム名から会話が発展、単調な時間を奪ってくれる。彼女はサロマを完走しているウルトラランナーのようだ。暫しの会話は続いた。まだ自分より余力がありそうなので、再三先を薦めたが、**やる気を失いずると落ちていってしまうであろう自分の結末を見透かされ、そうさせまいと励ましてくれるのでした。**やがて35kmを過ぎた頃から太陽は隠れ薄暗くなってきた。前々回は**感動に酔いしれ、**前回は**充実感を噛み締めながら、**まだ落ちない夕日を浴びて心身疲れながらも気力十分で走っていたかも知れない。今回は既に日が落ちた夕暮れの中を**励まされながら**の35km通過である。これまでにこんな心境になった事は無い、考えてもいなかった展開で幕が下りようとしている。あれからもう2時間以上並走している。やがて街中に入りもう直ぐゴールである事を感じさせられる。トレーニング不足とエネルギー補給の失敗は、さらに空腹感と脱力感が追い討ちを掛けてくる。しかしもう今は**あの惨めな気持ちは無い、出会い、ずうっと励ましゴールまで引っ張ってくれた事に感謝しテープを切ったのでした。**

もしあのまま終わっていたら本当に惨めだけが記憶に残るそんな大会になっていたかもしれない。。。。

（結果 S1.11.11 B5.51.15 R5.50.11 T12.52.37）

